

漢文水滸伝と蒙文水滸伝との比較考察

～ファージェイの「武松打虎」における

虎退治の叙述箇所を基に～

‘*Shui-hu chuan*’ and Faḡei’s recitation: A comparison with special emphasis on “Wu-song exterminates a tiger”

藤井真湖

Mako Fujii

Abstract

This study indicates the integration of the Chinese text *Shui-hu chuan* into the Mongolian culture, focusing on the description of the chapter “Wu-Song exterminates a tiger” recited by Faḡei, a famous reciter in Mongolia. The texts used here are a Chinese version: The 70-chapter version of *Shui-hu chuan* published by Jiangsu Guji Publishing, 1985, and the Mongolian version recited by Faḡei: (Mongḡol uran ḡokiyal-un degeḡi ḡayun bilig orosibai) edited by Č.Damdingsürüḡ, the fourth edition, Inner Mongolia Commoner Publishing, Hohhot, 1979. Five points can be observed between the original Chinese version of Wu-song’s fight against a tiger and its Mongolian oral version recited by Faḡei.

① Lack of the tiger’s three moves

The Chinese version describes the three moves of the tiger: kicking with the forelimbs, kicking with the hindlimbs and sweeping with the tail. These could be fascinating aspects of the story for the listeners. However, Faḡei did not prefer to describe these moves in his recitation. Instead, he ventured to avoid these completely.

② A deviation from the move of kicking the middle of the tiger’s forehead and his eyes

The original version describes Wu-song immobilizing the tiger with a kick to the middle of his forehead and his eyes; however, in Faḡei’s version, Wu-Song strikes the tiger’s head with his hand(s).

③ The absence of the tiger’s move of digging a hole

The scene in which the tiger digs a hole and piles up earth on both the sides has been described comically in the Chinese version. In contrast, this scene is absent from Fa'jei's version. He might have avoided the description of the dying tiger as in the original because it is comical.

④ Lack of description of the tiger's blood

Unlike in the Chinese version, Fa'jei's recitation also lacks the description of the tiger's blood.

⑤ Different ways of killing the dying tiger

In the original Chinese version, the hero kills the tiger with a fatal blow and leaves it to bleed; however, in Fa'jei's version, the way of killing the tiger reminds one of the killing of sheeps and goats.

The five differences mentioned above can be summarised as follows: The first three points imply that a certain respect was accorded to the tiger in Fa'jei's version. The fourth and fifth points imply that there was a taboo on the mentioning of blood in Fa'jei's version. Contrary to Fa'jei's intention, by avoiding the description of the tiger as a four-footed animal, the tiger is personified. Fa'jei's unintended personification of the tiger is also connected to the literary arts without visibility developed in the Mongolian culture while the illustration (of Wu-Song killing the tiger) contributed greatly to the circulation of *Shui-hu chuan* in the Chinese culture.

0. はじめに

中国近世通俗文学の代表格であり四大奇書のひとつに挙げられる『水滸伝』は明代初期にまとめられた白話長篇章回小説であり、明清二代を通じてたびたび焚書となったにもかかわらず、人々の間で脈々と読み継がれてきた娯楽小説である(林 2011: 3)。この漢文章回小説は、いつしかモンゴル人にも影響を与え、モンゴルの説唱芸人は四胡を伴奏にそれをモンゴル語で語るようになった。こうした物語はモンゴルの“ホーリー・ウリゲル”と呼ばれる口頭伝承の一大ジャンルに取り込まれた。本論では内蒙古哲里木盟扎魯特旗出身の著名な説唱芸人のファージェイ(1902-1962)の語りを筆記したテキストを取り上げ、その特徴の一端を考察するものである¹。

1. 本論の目的及び対象テキスト

本論の目的は、モンゴル人文化に『水滸伝』がいかに受容されたかの特徴を、著名な説唱芸人ファージェイの語った「武松打虎」の箇所を事例として考察することである。結論を先取りすると、ファージェイは漢文水滸伝をモンゴル文化における動物観と生命観に適合させ、独自の蒙古水滸伝の世界を創りあげていた。本論ではそれを具体的に提示してみたい²。

本論で用いた漢文水滸伝のテキストは70回本の金聖嘆全集の『貫華堂第五才子書水滸傳(上)』第22回「横海郡進留賓景陽岡武松打虎」であるが、その佐藤一郎による翻訳も参照している³。水滸伝には諸版本があるが⁴、本論で対象とする内容はどの版にも内容的に共通する部分であるので、どの版を用いてもとくに問題はないであろうと考える。一方、ファージェイの蒙古文はダムディンスレンの蒙古文学百選を用いた(Damdingsürüng 1979: 1578-1695)。ただし、ダムディンスレンのテキストには、タイトルの前に「第22回」と記載されていること、ファージェイが生きた時代に主流であったのが70回本やその序章を第1章とした71回であったことから見て(岩崎 2010: 64)、70回本の水滸伝を下敷きにした可能性が高い⁵。

2. 議論の流れ

ファージェイの語った蒙文水滸伝を漢文水滸伝と詳細に比較するさいに、方法としては、漢文テキストとファージェイのテキストのそれぞれの当該部分の概要をおこなうのがよいかと思われるが、そうした単純な内容構成の比較さえできないのが実情である。むしろ、ファージェイのテキストが基づいたのが漢文水滸伝であることは間違いないが、内容構成にしても大きな違いが認められるのである。それゆえ、3. においては、ファージェイのテキストの内容構成を提示する。その上で、漢文水滸伝に基づきながら、ファージェイのテキストがどのように改変されているのかを、主人公である武松が虎とどのように闘うかという闘い方の細部に着目しながら考察した。4. ではこの議論を要約し、ファージェイがモンゴル文化に適合するように漢文水滸を改変したことを結論づけた。5. においては、漢文では問題にならなかった虎を殺す正当性についてファージェイが考えていた痕跡を指摘し、3. や4. での議論をさらに深める。そして、最後に、6. においては、語り手の意図とは別に生じている、ファージェイ・テキストにおける虎の擬人化を提示してみたい。

なお、末尾には本論で扱うファージェイのテキストについては、これまで邦訳がなされなかったためローマ字転写と邦訳を行った。ただし、対比部分として抽出すべき箇所として、本論では武松が酒に酔って山中で眠っている間に虎が登場する場面から、武松が虎を殺すまでの箇所に限定しておいた。

3. 漢文との比較におけるファージェイ・テキストの特徴

ここでは「武松打虎」のうち、武松と虎との死闘の場面を比較することにしたい。そのまえに、まず、ファージェイの説唱テキストにおける虎の登場から虎の殺害までの場面構成を示すと次のa～mのようになる。末尾の《資料1》にも挿入してあるので、適宜参照されたい。

- a. 虎の登場の場面
- b. 虎の習性についての叙述
- c. 武松と出会った際の虎の状態についての叙述

- d. 眠っていた虎が空腹感を覚えて起きだす場面の叙述
- e. 武松が虎に気がついて仰天する場面
- f. 虎が武松を発見する場面
- g. 虎と武松が遭遇する場面
- h. 武松が虎を棍棒で打ち据えようとする第1の闘い
- i. 武松が虎を棍棒で打ち据えようとする第1と第2の闘いの間の両者の心理戦
- j. 武松が虎を棍棒で打ち据えようとする第2の闘い
- k. 武松が虎を素手で打倒しようとする第3の闘い
- l. 武松が虎を成敗する最後の場面
- m. 武松が虎を成敗した語りを締めくくる非韻文の箇所

武松と虎との死闘の場面を取り上げる理由は、一つには、この箇所が物語の山場となる部分であるためである。もう一つには、この箇所がとりわけ漢文とファージェイのテキストの差異が突出して現れている箇所だからである。すなわち、この箇所を考察することは、両者の相違を根本的に考えることにつながる。以下においては、漢文を基にしながら、蒙文で欠落或いは変更されている叙述を①～⑤の5点、指摘したい。

① 虎の三技についての叙述の欠落

漢文の場合、この場面の面白さは、虎の動作とそれに呼応する武松の動作の叙述の巧みさに存在しているといえる。とくに、虎の動作の場合、三技(わざ)と呼ばれる「一扑、一掀、一剪」は注目できる。なぜなら、この3つの技に用いられる身体部位が異なっているからである。すなわち、「一扑」(ひとうち)には「前両脚」、「一掀」(ひとけり)には「後ろ脚」、そして「一剪」(ひとはたき)という技には「尻尾」という身体部位がそれぞれ用いられることになるのである。このうち、「ひとうち」すなわち「跳びかかる」以外の動作表現には、演劇性が感じられる。とくに、3番目の尻尾技は、曲芸的動作であって、死闘の場面における表現であるにも関わらず、滑稽味を帯びている。

一方、蒙文の場合、この虎の3技についての叙述が全て欠落している。確かに、最初の「一扑」(ひとうち)に対応する動作は存在している。しかし、3つの技は、3つあるからリズムが生まれるのであり、1つだけでは存在すると言えないであろう。虎の3つの技についての叙述は印象的かつ聴衆の興味を引くものと想像される。それゆえ、漢文からの翻訳や翻案であったとしても、蒙古語による説唱において大いに利用できたはずである。とすると、ファージェイは虎の3つの技を敢えて用いなかったと考えるのが妥当であろう。

② 武松が虎の頭の皮をつかんで、虎の眉間・目に片足で蹴りを入れる動作の変更

前述の①の叙述に後続する場面で、漢文においては、武松が虎の頭の皮をつかんで押さえこんだ後、虎の眉間・目に片足で蹴りを入れる動作が叙述されている。これに対して、蒙文では、虎の脚を膝まづかせて、虎の眉間を殴っている。すなわち、足蹴りではなく、虎の身体を抑えてつけてから、手で殴っているのである(《資料》の1. の1673:15～1675:06)。

これ以外にも違いはまだある。この時点で、漢文では武松は虎を殺すに至っておらず、次の③で述べる叙述の後に虎を殺している。これに対して、蒙文では虎を殺している。つまり、漢文の2つの箇所が蒙文では1つになっているような形になっている。それゆえ、これをより深く考察するためには、次の③も同時に考察する必要がある。

③ 虎が後両脚で穴を掘り、両脇に土を盛り上げ、その穴に武松が虎の頭を突っ込み、殴りつけるという動作の欠落

②で述べたように、蒙文にはこの③の箇所に対応する部分がない。漢文の観点から言うと、前述の虎の三技の演劇性と同様、この虎の穴掘り動作も演劇的な所作である。そして、こうした演劇性は“滑稽さ”も帯びている。それゆえ、この箇所は、漢文においては“面白い場面”として設定されている。漢文に忠実な蒙文版を語るのであれば、ファージェイはこうした“滑稽さ”を重視すべきであったろう。

しかし、漢文におけるように、殺される動物を滑稽な存在として描くことは、モンゴル文化における動物観とは異質であったのだろう。ここでいうモンゴル文化における動物観とは、一言でいえば、“動物にはリスペクトの念(尊崇の念)を持つべきだ”という考え方を指す。この考え方をもとにすると、虎の三技や虎の穴掘り動作を忌避した理由が了解可能なものとなる。蒙文で虎に攻撃を与えるさいに、足ではなく、手を用いていることも、こうした動物観と関係しているように思われる。漢文におけるように、虎を足で攻撃する行為は動物に対するリスペクトが著しく欠けているように見なされた可能性がある。漢文においては、虎は一貫して「大蟲」と表現されているところを見ても、虎に対するリスペクトの無さが表れているように思われる。それゆえ、蒙文においては拳で殴る行為だけがあるのではないかと考える⁶。

④ 虎から出血した血の叙述の欠落

漢文においては、武松が虎を打ちのめす様子が次のように描写されている(曹方人・周錫山 標点 1985:350)。

打到五七十拳、那大蟲眼裏、口裏、鼻子里、耳朵裏、都迸出鲜血来
五、七十回も拳で殴りつけると⁷、虎は目から、口から、鼻から、耳から、血がほとぼしり出て

鮮血への言及は、もう一度次のように出現するので、偶然ではない（曹方人・周錫山標点 1985 : 350）。

就血泊裏雙手来提時、那裏提得動
血の海の中から両手をかけて持ち上げにかかったが、そこから動かさない。

ファージェイの蒙文には血への言及は一切ない。蒙文では、血の代わりに、「暴れまわった虎は／急に身を沈めるや／ぐにやりとしてしまった」「力のない尻尾を／伸びさせてしまった」「逃れようとしていた体は／ふにやりとなってしまう」というように、虎が衰弱した様子を描いている（《資料》の 1675:07-1675:13）。

⑤ 瀕死の虎を死に至らしめる方法の相違

漢文においては、次のように叙述されている（曹方人・周錫山標点 1985 : 350）。

只怕大蟲不死 把棒槌又打了一回。眼見氣都沒了⁸，方纔丟了棒
ただ虎が死んでないのではないかと怖れ、棍棒でもう一度打ち据えた。（虎の）息が絶えたのを見て、ようやく棍棒を捨てた。

恐怖のためだとはいえ、武松はここで虎に最後の一撃を加えている。しかし、瀕死の虎に対して、ファージェイが次のように叙述していることは、興味深い。

1675:14 youl tasuraju／大動脈を切り、

1675:15 ami suyuraju／命を奪い、

こうした表現は、羊を屠殺する行為を思い起こさせる。両者の違いは、漢文では、“血を流させる方法”になっているのに対し、蒙文では、“血を流させない方法”になっていることにある。④で述べたように、蒙文においては、血を流している動物を描くことに抵抗があったらしい。つまり、最終的に死に至らしめる方法には、文化的な差異が表れているといえるのである。

たしかに、蒙文において血の叙述が欠落しているのは、次のようなところからも明らかである。重要なので末尾に付加した《資料》から再度引用しておく、次のようになる。なお、とくに強調したい翻訳部分は斜体にしてある。

1676:04 振り返ってよく見ると、この両者が戦い合った付近には切り刻まれた茂みが残っていた。

1676:05 ハルガナは一本も残っていなかった。あちらこちらにあった石が投げ飛ばされて、この両者の力で穴ぼこができていた。

1676:06 地面に泉が湧き出たような穴ぼこができていた。凶暴な虎のひよめきを打ちのめして殺したのであって、

以上のように、武松と虎との死闘の痕跡は、虎から流された血によってではなく、あたり一面の灌木が根こそぎ抜けて、そのあとに穴ぼこができるほどのものであったというように、灌木の消失によって示されているのである。

4. 結論：蒙文における改変の理由—虎へのリスペクトと血を叙述することのタブー

3. で取り上げた蒙文における漢文の変更点①～⑤を要約すると、次のようになる。

- ①虎の三技についての叙述の欠落は、虎の動作の滑稽さを避けるため。
- ②虎への足蹴りについての叙述の欠落は、虎へのリスペクト (respect) のため。
- ③虎の穴掘りについての叙述の欠落は、虎の動作の滑稽さを避けるため。
- ④虎から流れ出る血の叙述の欠落は、血を叙述することへのタブー(taboo)のため。
- ⑤瀕死の虎を殴るという行為が、羊を屠るような行為に変更されたのは、血をさらに流させることを避けたため、血を叙述することへのタブーのため。

以上をまとめると、フェージェイが蒙文で改変した理由には、虎の滑稽さを避けようとした①と③、虎へのリスペクトを表わすための②、それから、血を叙述することへのタブーのための④と⑤があるということになる。ここで、滑稽さを回避しようとした①と③は、事実上は、②の虎へのリスペクトと同様な心情が働いているので、同じグループに入れることができる。それゆえ、上記の①～⑤は、最終的に次の2つにまとめることができる。

- (1) 虎に対するリスペクトが、漢文には見られないが、蒙文にはある。
- (2) 血に言及することに、漢文ではタブーはないが、蒙文ではタブーがある。

上記の(1)と(2)に要約しうることは、漢文水滸伝をモンゴル語で語るさいに、フェージェイには終始一貫した態度があったことを示している。その態度とは、蒙文ではモンゴル文化における動物観と生命観を反映させるというものである。蒙文に見られる動物観は、狩猟や遊牧という生業形態で育まれた感性と言えるかもしれない。血の叙述をタブー視する感性は、おそらく蒙古族の英雄叙事詩においても共通しており、フェージェイの蒙文水滸伝に限定される感性ではないものと考えられる。いずれにしても、虎へのリスペクトと血を叙述することのタブーが、漢文の水滸伝における内容の改変を促したといえる。換言すれば、漢文における特

質であった“滑稽さ”と“具象性”が、蒙文では、“厳粛さ”と“抽象性”に取って代わったのである。

5. ファージェイのテキストにおいて示されている虎を殺害する論理の正当性

4. においては、漢文水滸との比較で観察されるファージェイ・テキストの特質を指摘した。実は、ファージェイのテキストを詳細に観察すると、虎を殺すことの正当性の根拠を考えていた痕跡が見える。この点については、漢文水滸においては、全く見られないことである⁹。

先に示した武松と虎との死闘の場面の a~mのうち、ここで、重要なのは、e の最後のほうと、d の最初の箇所である。重要なので書き出してみると、次のようになる。翻訳の斜体部分は強調のためのものである。

e の最後の箇所

- 1662:01 ajiylaŋu lablaŋu üjekü-dü /よくよく見ると、
 1662:02 uuryuysan usun ni /飲んだ水が
 1662:03 singgeŋü sayiqan güičeŋei. (身体に) 完全にしみ込んでいた。
 1662:04 ulayan čisu miq-a ni /赤い血肉は
 1662:05 bey-e-dur baqan tayarajei. /腹に入って重くなっていた。

以上の表現は、虎が決して空腹ではなく満腹していたという状態にあったことを示している。

d. 眠っていた虎が空腹感を覚えて起きだす場面の叙述

- 1662:06 untačiyсан bars-tu /眠りこけた虎は
 1662:07 öliškü sedkil orujei. /腹がすいた心持ちになった。
 1662:08 öliün sedkil törügdeŋü /満たされていない心持ちになった。

この叙述にもとづく、武松を襲ったさいに、虎は喉が渇いてもいず、また、空腹でもなかったことになる。これは、漢文水滸とおおいに異なる点である。漢文では、簡潔に、「那大蟲 饑又渴」とあり、虎は空腹で喉も渇いていたとある(金聖嘆 1979:349)。つまり、ファージェイ・テキストで示されているのは、武松を襲った理由が虎の生物学的な欲望を満たすためではなかったということである。虎の欲望は、生物学的な欲望以上のことであり、それゆえ、あってはならないという論理となり、武松が虎を最終的に殺害してもよい理由となっているのである。

こうした改変の背景には、凶暴な動物だからといって、それだけが殺害の理由になるというのは、モンゴル人にとってはなじみのない考えであった可能性がある—むしろ、漢文水滸においては、こうした考え方こそ、むしろ諧謔精神を損なうものとしてなじみのないものとはなるうが—。

6. さいごに：蒙文で虎が擬人化される理由—視覚性のないモンゴル型の言語芸術の影響—

最後に、蒙文には虎の擬人化が見られることを提示してみたい。前述のように、蒙文においては、①の虎の三技が蒙文において欠落しており、また、③で虎の穴掘りが欠落している。すなわち、蒙文においては、漢文におけるような、虎の脚で行った行為についての描写が欠落している。このことを重視すると、蒙文においては、虎の四足歩行という特徴が後退している。それゆえ、この虎を人間の比喩として捉えることも可能となってくる。その場合、蒙文においては、強者や王者、英雄といった存在を非明示的に表している可能性がある。血を流さない殺し方も、貴人に相応しい殺し方となる¹⁰。

とはいえ、ファージェイ自身がこの比喩を意図していたとは考えにくい。なぜなら、本論では取り上げなかったが、別の箇所に、虎の動物としての生態についての叙述もあるし(Damdingsürting 1979: 1660—1661)、また、虎の尻尾についての言及も《資料》の箇所だけでも8回あるからである(1661:11, 1662:11, 1664:10, 1665:12, 1666:5, 1668:5, 1672:4, 1675:10)。これについては《資料》内に①～⑧の番号を付したゴシック体の太字で示しておいた。しかし、虎のこの後ろ脚による技の欠落による二足歩行的な虎の形象は、語り手の意図とは無関係に、前述したような、虎へのリスペクトと血の叙述のタブーというファージェイの語りの特徴も相重なって、虎をより人間的な存在に近づけている。

それゆえ、虎の擬人化という読み方を否定させる叙述があるにも関わらず、この隠喩の存在を完全に打ち消すことは難しいといえる。結果的に、ファージェイの「武松打虎」における虎は、動物の虎としても理解しうるし、意味的比重は低いものの、英雄叙事詩に出てくる主人公勇者の敵やマンガス(怪物)としても理解しうるような存在という両義性を帯びることになったといえる。蒙文における虎の両義性は、漢文水滸には存在しない特徴である。虎＝人間という隠喩が発現しうる背景には、ファージェイの説唱した言語芸術には、漢文水滸の流布において果たした挿絵(虎を退治する武松の姿を描いた挿絵)という視覚性がなかったことが関係しているであろう。当然と言えば当然であるが、挿絵は虎を動物の虎としてのみ描くので、虎の擬人化は生じないのである。

《資料》武松打虎の蒙文版（1659 頁 2 行目～1676 頁 8 行目）

a. 虎の登場の場面

- 1659:02 je kü, salki ni orgilju /さてさて、風が荒れ、
 1659:03 kei šuugin üliyejü /ざわざわと吹き、
 1659:04 üjejü bayital-a salki /じっと見ていると、風が
 1659:05 ujugür ni dayaran šuugil-a. /枝の先にぶつかり音を立てた。
 1659:06 uryuɣdaysan oi siyui-yin /生えた雑木林の
 1659:07 üjugür namay-a qolbuba. /枝の先と葉が絡まった。
 1659:08 ü söng untaju bayital-a /武松は寝ていたが
 1659:09 butu sirui burgijü /茂みが舞い上がり
 1659:10 ayula sirui qanggiraba. /山土が轟いた。
 1659:11 ü söng sočiyad /武松は驚いて
 1659:12 bosču lablayad qaraq-u-yin üy-e-dü /飛び起きよく確認しようとしたとき、
 1659:13 tere qoyurundu üneker /その間、ほんとうに
 1659:14 orčin toyurin-u ɣajar /周囲のところに
 1659:15 čayan qaljan tolɣai-tai /額に白い毛のある
 1659:16 čidal kücü büridügsen /力をみなぎらせた
 1660:01 čengker köke eriyen /淡い蒼斑の
 1660:02 nigen yeke bars ɣaljayuraysan ajei. /一頭の大きな虎が暴れていたのである。

b. 虎の習性についての叙述

- 1660:03 bars gedeg yayum-a čini /虎というものは
 1660:04 bartay-a-tai ayulan-du bayiday. /険しい山にいるものである。
 1660:05 buday-a qoyula-yi idekü ügei bolbaču /食物を食べないでいると
 1660:06 siyud miq-a-yi soruju /すぐさま肉をすすり
 1660:07 samayun-i degegsi degdegedeg bolqur /騒ぎを引き起こすので、
 1660:08 erten-eče untaday /早いうちから眠りにについている。
 1660:09 üde-yin [üde-yin でなく edüi-yin?—藤井注] üy-e-dü bolbal 正午 [今] 頃になると
 1660:10 untaysan-ača-ban seriged yarday. /眠りから覚めて出てくる。
 1660:11 üde-yin qalayun-du amarču kebtedeg. /正午の暑いときに休息して横たわる。
 1660:12 untaju sayiqan seribel /よく眠ってから目覚めると、
 1660:13 orui-yin serigün orubal /森の冷気が入りだすと
 1660:14 inggedeg busqu uçir-tai /このように起きだしてくるわけである。

c. 武松と出会った際の虎の状態についての叙述

- 1660:15 muyai čay-ača ekileged / 巳の時刻から
 1660:16 mungqaratal-a untaju / 朦朧とするまで眠り
 1661:01 morin čay-i kürtel-e / 午の時刻まで
 1661:02 mayujiratal-a-ban untaju / 不覚となるまで眠り
 1661:03 qonin čay-i kürtel-e / 未の時刻まで
 1661:04 kökeretel-e-ben untaju / いびきをかいて眠り、
 1661:05 bačin čay-un üy-e-dü / 申の時刻に
 1661:06 bey-e ni baqan amaraju / 身体がかなり休まり
 1661:07 bosuyad baqan degegsileju / 起きだして少しばかり上体を起こし
 1661:08 öndyijü degegsi busču / (そのまま) 身を起こして起き上がり、
 1661:09 üjekü nidü ni gölüyijü / 見る眼は微動だにせず、
 1661:10 ebsiyen suniyaju debsiju / あくびをしたり伸びをして
 1661:11 aru-yin segül①-iyen ködelgeju / 後尾を動かして
 1661:12 ama qamar-iyen angyayiju / 口や鼻を大きく開け、
 1661:13 arjayiqu sidü ni irjayiju / 歯をむき出して、
 1661:14 alay nidü ni bölteyijü / 瞳は微動だにせず、
 1661:15 auγ-a küčün ni adquju / 怪力がみなぎって、
 1661:16 abiyas baqan törüju 機転が生まれ
 1662:01 ajiylaju lablaju üjekü-dü / よくよく見ると、
 1662:02 uγuγsan usun ni / 飲んだ水が
 1662:03 singgeju sayiqan güičejei. (身体に) 完全にしみ込んでいた。
 1662:04 ulayan čisu miq-a ni / 赤い血肉は
 1662:05 bey-e-dur baqan tayarajei. / 腹に入って重くなっていた。

d. 眠っていた虎が空腹感を覚えて起きだす場面の叙述

- 1662:06 untačiyas bars-tu / 眠りこけた虎は
 1662:07 ölüskü sedkil orujei. / 腹がすいた心持ちになった。
 1662:08 ölü sedkil törügdeju / 満たされていない心持ちになった。
 1662:09 öndeyijü bosuγsan üy-e-dü / 上体を起こして立ち上がったとき、
 1662:10 ayulan dotur-a sirbeju / 山中で横をちらりと一瞥し
 1662:11 segül②-iyen ködelgeju / 尻尾を動かして、
 1662:12 čiki-ben qulayilyaju / 耳を伏せて
 1662:13 sidü-ben irjayiju / 歯をむき出しにして、
 1662:14 sür talbin bosqu-du qarin / 威風堂々と起き上がると、しかし、
 1662:15 soytayiyad [soysuyiyad?] unaysan modun-u / 揺れて倒れた木の

- 1662:16 salay-a namay-a šuugijū /枝がガサガサと音を立て
 1663:01 salki jiber qouslan /冷たい風も混ざって
 1663:02 čimege ni ilegüü yarču /よけいに音が出て
 1663:03 sirui čilayu keyisčü /泥や石が吹き飛ばされて
 1663:04 oytaryui-dur degdejü /宙に巻き上がり
 1663:05 čidal küčütei bars ajei kö. /屈強な虎である。

e. 武松が虎に気がついて仰天する場面

- 1663:06 sayi mönü bars /例の虎は
 1663:07 eyin teyin ebsiyen suniyayad /あちらこちらであくびをしたり伸びをして
 1663:08 idekü yayum-a erijü /食べるものを探し
 1663:09 inggejü bayiqu-yin üy-e-dü /こうしているときに
 1663:10 ene sayi sočiyad bosuydaysan /この、驚いて跳び起きた
 1663:11 ü söng-ün bey-e /武松の身体は
 1663:12 urbaju qarayad üjekü-dü /後ろを振り返ってよく見ると
 1663:13 aya! qada ayula-yin dotur-a /なんと！岩山の中の
 1663:14 oi siyui niyta /鬱蒼とした茂み、
 1663:15 egün-i lablaqu-du /これをよく確認すると、
 1664:01 üneker činu barayun qoyin-a /実際、その右後ろに
 1664:02 jöri güü ergi-yin qamar /切り立った崖の鼻に
 1664:03 čabčil yeke qada /砕かれた巨岩を
 1664:04 čidquju bayuqsan youl /注ぎこんで流れ落ちる河、
 1664:05 suqai qusun modu /ギョリュウや竹の木でできた
 1664:06 siyui oi-yin dotur-a /藪や木々の中で
 1664:07 söргеü nigen amitan /横切る一匹の動物
 1664:08 čayariqlaju üjekü nidü /ぐるりと（周囲を）うかがう目つきは
 1664:09 čakilyan odun-du adali /否妻（のように光る）星（の輝き）に似て
 1664:10 čayadai bayiqsan **segül**③ /相手の尻尾が
 1664:11 qoyisi-ban selgüjü /後で左右に動き
 1664:12 nigen yayum-a qarin /何ものかが、しかし、
 1664:13 sür badarayulju /威圧的に
 1664:14 qurdulan bosqu-yi /すばやく立ち上がったのを
 1664:15 ajiyla ju labla ju qaratal-a /とくと見ると
 1664:16 ayul-un bars mön-e. /まさに危険な虎であるではないか。
 1665:01 aya! gečegüü ü söng /なんと！鋭い武松は、

- 1665:02 ayčing kijü sočil-a / 一瞬にしてギョツとした。
 1665:03 auγ-a kücütei bolbaču / 怪力の持ち主であれど
 1665:04 ayuqu baqan orul-a. / (武松が) 怖気づいたこと、しきりであった。
 1665:05 küi lablaju üjged / 全体をよく見ると
 1665:06 köb kijü sočil-a. / 卒倒せんばかりに仰天した。
 1665:07 kengküdeg sedkil-ün dotur-a / 胸の内で
 1665:08 qaliraju orul-a / 怖気づいた。

f. 虎が武松を発見する場面

- 1665:09 köke eriyen bars köngginejü bayiqu yum / 蒼斑の虎が鼻息を荒くしている。
 1665:10 kögesü ni qoyar tal-a-bar / 涎が両側に
 1665:11 layar layar unaju / だらりだらりと流れ落ち
 1665:12 qoyitu segül④-i γuyadaju / 後尾を打ちつけて
 1665:13 γurban tal-a-yin / 三方向にあった
 1665:14 suqai modu-nuyud / ギョリュウや雑木林が
 1665:15 tasur tasur oyiciju / ばさばさと倒れて
 1665:16 čayadai bayiqsan bars-un / 相手の虎の
 1666:01 jo-yin üsün bosču / 背中の毛が総毛立ち、
 1666:02 julai-yin üsün sarbayju / ひよめきの毛も逆立って
 1666:03 jebkei nidü ni gölüyju / 土色の目はじっと据わって
 1666:04 jalayad činaysi qaliju / そのまま向こうに跳んで
 1666:05 öndür segül⑤ ni qoruyilduju / 高く (上げられた) 尻尾は反り返って
 1666:06 ösürkü bayidal oruju / 跳び上がるような感じになって
 1666:07 ölon sedkil qorusču / 満たされていない心に憎しみの情が湧き、
 1666:08 üneker čingγ-a-bar ködelju / なんとも力強く動いて
 1666:09 üjged qaraq-du / じっと観察していたところ
 1666:10 ü söng-i üjebe / 武松を見た。

g. 虎と武松が遭遇する場面

- 1666:11 ü söng-i üjged / 武松を見て
 1666:12 ölüščigsen bars / 腹を空かせた虎が
 1666:13 untayad serigsen omuy-tayan / 寝て目覚めたふてぶてしさで
 1666:14 ebsiyen sunian amaraju / あくびをして (体を) 伸ばして休むや
 1666:15 sür kitel-e ösürcü / ひゅっと跳び上がり
 1666:16 sayi bars iretel-e / ちょうど虎が (こちらに) やって来ると

- 1667:01 čayadai bayiysan ü söng / 相手側の武松は
 1667:02 sočiysan küčün-degen / ハッとした勢いで
 1667:03 sür kitel-e jayılaju / ひよいと身をかまし
 1667:04 sidem-ıyan adquju / 棍棒を掴んで
 1667:05 sidü-ben jayuju / 齒を食いしばり
 1667:06 qarın nigente uçıraba. / しかし、すでに鉢合わせになった。
 1667:07 qaldaju nigente jolyajei. / じりじり近寄ってすでに鉢合わせになっていた。

h. 武松が虎を棍棒で打ち据えようとする第1の闘い

- 1667:08 qamtu-bar qoyayula-ban medey-e ged / お互いに勝負しよう
 1667:09 alayan-du bariysan sidem / 手のひらに掴んだ棍棒を
 1667:10 abuyad degegsi teleyijü / 持って宙にかざして
 1667:11 auγ-a küčütei bars / 怪力の持ち主の虎が
 1667:12 alus čayan-a üsürčü / 遠く離れたところに跳んでいって
 1667:13 urban nasi oruju / くるりところらに向きを換え、
 1667:14 üsürin irekü-yin üy-e-dü / 跳んでくるさいに
 1667:15 omuq yeketei ü söng / 気性の激しい武松は
 1667:16 odu urytun jolyaju / さあ、と、(虎と) あい対面し
 1668:01 γar-tu bariysan sidem-ıyer / 手に掴んだ棍棒で
 1668:02 γabala-yi erin jančiju / (虎の) ひよめきを狙って打ちつけ (たものの)、
 1668:03 γaljaju yeke bars / 凶暴な虎は
 1668:04 γaruyad činaysi üsürčü / (これを) かわして向こうに跳び
 1668:05 γariqalaju bayiysan segül⑤ ni / 輪のようになった尻尾が
 1668:06 γajar-i γuyadan tulju / 地面を打ちつけて
 1668:07 küčü yekedü bars / 力がみなぎっている虎が
 1668:08 körben nasi kömürjü / こちらに転がってひっくり返り
 1668:09 qoyar adalı-bar simdan / 双方とも互角に必死に動き、
 1668:10 urysarču abun zörilčeju / 次々とすれ違い、
 1668:11 qoyayula bayiri egüsgeged / 双方とも位置を換えながら、
 1668:12 iderkeglen irel-e / 熱を帯びてきたところ

i. 武松が虎を棍棒で打ち据えようとする第1と第2の闘いの間の両者の心理戦

- 1668:13 iden-e gesen boduly-a / 食べるぞ、という思いが
 1668:14 iderkeg bars-eče ugüsčü / 屈強な虎から生まれ
 1668:15 egün-i yayakibaču / これは、どんなであれ

- 1668:16 gem-ügei ged / 何でもない、と言って
 1669:01 ü söng dotur-a-ban boduju / 武松は内心思い
 1669:02 jalgiqu gesen boduly-a / 飲みこもう、という思いが
 1669:03 jaliqai bars-eče egüsčü / 狡猾な虎から生まれ
 1669:04 jančiju egün-i unayaqu ged / 殴ってこれを倒すぞと
 1669:05 jalayu ü söng boduju / 若き武松は思い
 1669:06 ayulan-u orgil-du / 山の頂に
 1669:07 ayungy-a duuyarqu adali / 雷が鳴り響いているのと同じように
 1669:08 qada ayula düngginejü / 岩山が轟音をとどろかせ
 1669:09 qaryan-a qayilasu ni unaju / ハルガナ (植物名) や楡が倒れ
 1669:10 kei salki qouslaju / 風もあいまって
 1669:11 ayula qada düngginejü / 山や岩が轟音をとどろかせ
 1669:12 uryuy-a modu šuugiju / 生えている木が風いで
 1669:13 čilayu sirui degdejü / 石や土が巻き上がり
 1669:14 iderkeg köčü-tei qoyayula / 屈強な力の持ち主である両者は
 1669:15 ergüljü bayiqu-yin üy-e-dü / (場所を) ぐるぐると移動しているときに

j. 武松が虎を棍棒で打ち据えようとする第2の闘い

- 1669:16 er-e köčü-tei bars / 雄々しい力の持ち主である虎は
 1670:01 ergiged degegsi ösürčü / 振り返って宙に跳び上がり
 1670:02 idemer bajayaju / 食らいつく体勢になり
 1670:03 ene qa-ban telijü / これ、前肢を伸ばしきって
 1670:04 abuysan küčü-ben neyilegüljü / 一点に力を集中させて
 1670:05 büs kitel-e bayutal-a / どすつという音を立てて着地すると
 1670:06 qang kitel-e jayilayad / (武松は) 金切り声を出して身をかまし、
 1670:07 körbegeđ yartal-a jančiqu ged / 転がってしのぐと、(虎を) 殴らんと
 1670:08 yar-tu bayiysan sidem-iyen / 手に持った棍棒を
 1670:09 abun tataysan-du / ぐいと振り上げようとしたところ、
 1670:10 sočiyad bayiysan ü söng-ün / 慌てていた武松の
 1670:11 čidal küčü yaruysan afei / 力が抜けてしまった。
 1670:12 čayadai bars-i bayutal-a / 相手の虎が着地すると
 1670:13 čokin geju sanatal-a / 打ち据えようと考えたが
 1670:14 čayan-a sidem pir geju / 肝心の棍棒がポキッと鳴ったので
 1670:15 ajiylaju lablayad üjekü-dü / よく見てみると
 1670:16 sidem domdayur quyurjei / 棍棒は真っ二つに割れてしまっていた。

- 1671:01 sinjilejü qarayad üjekü-dü/じつとよく見ると、
 1671:02 soçiyısan kücü-dü/驚いた勢いで
 1671:03 sirqadıyısan ügei uçir/ (しかし) 傷は負わなかったため
 1671:04 çınaysı yaruyısan bars/向こうに着地した虎は
 1671:05 şalab kücün jayılatal-a/さっと身をかわしたところ
 1671:06 çayan-a bayıysan nige modu-yi/向こうにあった一本の木の
 1671:07 salay-a nabçi-yi ni unayaju/その枝や葉っぱを落として

k. 武松が虎を素手で打倒しようとする第3の闘い

- 1671:08 çinggetel-e bars/こうしてから、虎は
 1671:09 ergijü gölüyijü üjged/振り返って身動きもせずじつと見ると
 1671:10 üneker yeke kilinglejü/本気で激怒してきて
 1671:11 bars gedeg niyur-tei/虎という顔をした、
 1671:12 busud yayum-a-tai tayaraqı ügei/他のものとは相容れない
 1671:13 odu qoyar uday-a /すでに二度とも
 1671:14 ösürkü-eçe buçaqu ügei tula/跳び上がるのを厭わなかったので
 1671:15 yurban uday-a-du/三度め
 1671:16 bars tere üy-e-dü/虎はそのときに
 1672:01 auy-a kücün-iyen yaryaju/怪力を発揮して
 1672:02 aman-u sidü ni irjayıju/齒がむき出しになり
 1672:03 alay nidü-ben bülteyilgejü/眼を突き出して
 1672:04 aru-yin segül⑦-iyen yuyadaju/後尾を地面に打ち据えて
 1672:05 ay-a sür kitel-e deger-e-eçe/なんと、ひゅーっと宙から
 1672:06 ösürün irekü-yin üy-e-dü/跳び出してくる、そのときに、
 1672:07 çidal kücü-tei ü söng/やり手の武松は
 1672:08 kei getel-e jayılaju/さっと身をかわし、
 1672:09 qoyısı uquriyad yarul-a./後方に退き (難を) 逃れた。
 1672:10 qarin bars/一方の虎は、
 1672:11 qoyitu bey-e-ber irekü-dü/後肢で立ったまま近づくと
 1672:12 muqur üldegsen sidem-iyer/使い物にならなくなった棍棒で
 1672:13 nigen uday-a jançıju/一度、打ちつけ
 1672:14 moqujıyad çınaysı/さらに使い物にならなくなって、相手が
 1672:15 urbayad yaraqı-yin qoyurundu/旋回してやってくる間に
 1672:16 uruyısı debsijü ü söng/前方に跳び上がって、武松は
 1673:01 duqu-yin aru/額の後ろ

- 1673:02 sili-yin tende / 首筋のそこに
 1673:03 čigireg küčü-ben yaryaju / 渾身の力を込めて
 1673:04 šab kitel-e küjügün deger-e-eče adquju / グイツと頸を掴んで
 1673:05 arjayičiysan bars-un / 総毛だった虎の
 1673:06 ayasi ni kürüged irel-e. / 逆鱗に触れた。
 1673:07 aman soyuy-a irjayiju / 牙をむき出し
 1673:08 čidal ni yaryad irel-e. / 力を振り絞ってきた。

1. 武松が虎を成敗する最後の場面

- 1673:09 adquyad abuyusan ü söng / しっかり (虎を) 掴んだ武松は
 1673:10 ami temečen boduju / 息を切らしながら考え
 1673:11 sili küjügüü-yi ni daruyad / 首根っこを押さえて
 1673:12 čigireg ü söng čirmayiju / 屈強な武松は踏ん張って
 1673:13 sidü nidü ni golüyiged / 歯や眼を微動だにせず
 1673:14 čayadai bars-tu maysiju(debijü) / 相手の虎に (腕を鳥のように) 振りかざして
 1673:15 küčü čidal-iyān yaryaju / 力の限り
 1673:16 köl deger-e-eče ebüdüglegü / 足をかけて膝まづかせて
 1674:01 dal mörü-yin qoyurundu / 肩の間を
 1674:02 daruju doruyisi ebüdügleged / 押し付けて下に膝まづかせ、
 1674:03 joydur-un-ki ni üsü-yi / 頸のところの毛を
 1674:04 adquju sayin abuyad / しっかり引つつかんで
 1674:05 darungyui ügei bars ged / 横暴な虎め、と言うや、
 1674:06 qorusul čayan-a-ača törüged / 憎しみが自然と湧き出てきて
 1674:07 köčüleju bayiysan bars-i / 抑えつけていた虎を
 1674:08 kebtögülju sayin daruyad / 横たわらせてしっかり押さえつけ
 1674:09 küjügün-ü arasun-ača / 頸の皮から
 1674:10 adquju sayin abuyad / 掴んで、しっかり掴んで
 1674:11 küčü čidal-iyān yaryaju / 渾身の力を込めて
 1674:12 barayun yar-un nidury-a-bar / 右の腕の拳で
 1674:13 balčayital-a jančiyad / ぼこぼこに殴りつけて
 1674:14 bayiysan olan küčü-ben / 備わった多くの力を
 1674:15 dabqur deger-e ni qouslayad / 何重にも合わせて
 1674:16 bajayaju bayiysan bars-un / (最後の一撃を加えるために) お膳立てしていた虎の
 1675:01 qoyar čikin-ü qoyurundu / 両耳の間に
 1675:02 qoyar nidün-ü dumda / 両目の間に

- 1675:03 qolkin-u-ki ni tende／だらしとしたその場所に
 1675:04 kuǰügüü-yin urida／頸の手前の部分に
 1675:05 köčü möči-ben ɣaryaǰu bayiyad／力という力を出し切って
 1675:06 ɣabala deger-e ni jančiɣsan-du／ひよめきの上から打ち据えたところ、
 1675:07 ɣalɣayuraysan bars／暴れまわった虎は
 1675:08 ɣudus ged očiɣsan čini／急に身を沈めるや、
 1675:09 ɣulǰiiɣad yabučil-a／ぐにやりとしてしまった。
 1675:10 ɣulbayičiɣsan **segül**⑧-iyen／力のない尻尾を
 1675:11 ǰigilgeged yabučil-a．／伸びさせてしまった。
 1675:12 buruɣulaǰu bayiɣsan bey-e ni／逃れようとしていた体は
 1675:13 larbayiyad yabul-a．／ふにやりとなってしまった。
 1675:14 ɣoul tasuraǰu／大動脈を切り、
 1675:15 ami suɣuraǰu／命を奪い、
 1675:16 auy-a küčütei bars-i／怪力の持ち主である虎を
 1676:01 alayad odu amarayulba／殺して、ようやく一息ついた。

m. 武松が虎を成敗した語りを締めくくる非韻文の箇所

- 1676:02 ǰa, küčütei böged čigireg ü söng aǰei. köke eriyen bars taɣaraǰei. küčü aldayɣsan bolbaču qarın bars-i jančın
 ／さて、力強く、そして屈強な武松である。(その彼が) 蒼斑の虎に出くわした。力が抜けたといっても、虎を殴りつけて
 1676:03 alayad qoyisi gederkü uquriɣad tögürig čegeǰi-ben daruǰu tere-tei üker čilayun deger-e sayuǰu öber-ün beye ǰing geǰü
 ／殺し、そのあとで、後ろに退いて、心を落ち着けて、そこにあった牛のように大きな石の上に座ると、自分の身体がきしみ、
 1676:04 ergičegülǰü sayıqan üjekü-dü ene qoyar-un bayilduɣsan oyir-a orčim-un ɣaǰar oytur oytur buda-nuɣud obayıǰu ɣaruɣsan
 ／振り返ってよく見ると、この両者が戦い合った付近には切り刻まれた茂みが残っていた。
 1676:05 qarayan-a-nuɣud oytu üldegsen ügei. ende tendeki-yin čilayu üsürüged ene qoyar-un küčün-dü qongqolai ɣaruɣsan
 ／ハルガナは一本も残っていなかった。あちらこちらにあった石が投げ飛ばされて、この両者の力で穴ぼこができていた。
 1676:06 ɣaǰar qudduɣ ayudaluɣsan metü qongqur köngkür sürtei aǰei. ɣalɣayu bars-un ɣabala-yi qay-a jančiɣad alaysan-ača

／地面に泉が湧き出たような穴ぼこができていた。凶暴な虎のひよめきを打ちのめして殺したのであって、

1676:07 busu tegün-i abču yabuγad ab gekü-üü. amisqul-iyān darūju čegeji-ben ayūjirayulju
odu ü söng ayulan-u öndür

／それを持ち上げて歩き出せ、と言うだろうか。息を整え、胸をなでおろしてようやく武松は山の上で

1676:08 jing yang yang ayula-du yabuqu-bar siidüged uruysi alquba.

／景陽岡山へと進むことを決意し、前方に踏み出した。

引用文献

<邦文>

岩崎菜子 (2010) 「現代中国の伝統文化復興と蘇る『水滸伝』もの」『「水滸伝」の衝撃 東アジアにおける言語接触と文化受容』 勉誠出版 pp.62-72.

駒田信二 (1959) 『水滸伝 (上)』 (中国古典文学全集) 平凡社, pp.215-223

小松謙 (2010) 『四大奇書の研究』 汲古書院

小松謙 (2011) 『「水滸伝」の誕生』 『中国近世文学と中国文化』 pp.109-149

佐藤一郎 (1979) 『水滸伝 I』 集英社版 世界文学全集 7, pp.287-298.

波多野太郎・監修／澤山晴三郎・編注 (1982) 『中国古典白話小説選』 東方書店。

林雅清 (2011) 『中国近世通俗文學研究』 汲古書院

村上知行 (1967) 『水滸伝 (一)』 河出書房, pp.288-306.

松村昴・小松謙 (2005) 『水滸伝』 株式会社ナツメ社

宮崎市定 (1972) 『水滸伝—虚構の中の史実』 (中公新書) [ただし初版は1933年]

吉川幸次郎・清水茂訳 (1998) 『完訳 水滸伝 (三)』 岩波文庫, pp.11-39

<蒙文>

白玉荣 (2011) 『扎鲁特民间文艺研究』 内蒙古出版集团, 内蒙古少年儿童出版社, 通辽。

Č.Damdingsürüŋ nayirayulba (1979) 《Mongyol uran jokiyal-un degeji jayun bilig orosibai》, dötöger debter, Öbör monggol-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

<漢文>

曹方人・周錫山標点 (1985) 金聖嘆全集 (一) 『貫華堂第五才子書水滸傳 (上)』 第22回「横海郡進留賓 景陽岡武松打虎」 江蘇古籍出版社, pp.341-353.

参布拉诺日布 (编写) 章虹 (翻译) (1989) 哲盟民間文艺丛书之六『蒙古胡尔齐三百人』 哲里木盟文学艺术研究所, pp. 46-49.

注

1 フェージェイについてのビブリオグラフィは（参布拉诺日布（编写）章虹（翻译）：1989：46-49）等々多くのものがある。

2 本稿は中国・中央民族大学の《蒙古说书<水浒传>与汉文原著<水浒传>比较研究》（研究代表者：朝克图 12BZW130）の助成を受けたものであり、当該助成の一環で、本論の主要部分については2015年10月16-17日に中央民族大学において行われた首届胡仁 乌力格尔国际学术研讨会的第二届胡仁乌力格尔高层论坛で朝克图教授との共同研究の成果として発表した。関連資料の収集や学会における蒙古語翻訳については朝克图氏をはじめとする関係者に大変お世話になったことを記しておきたい。

3 本論では、金聖嘆の70回本の佐藤一郎訳本（1979）以外にも、駒田信二訳本（1959）、村上知行訳本（1967）、吉川幸次郎・清水茂訳本（1998）も参考に用いた。漢文本としても、人民文学出版社版『水滸』（1972）における第23回「横海郡進留賓 景阳冈武松打虎」の「打虎」に関わる部分はピンインと語句解説が波多野太郎・監修／澤山晴三郎・編注『中国古典白話小説選』にあるので適宜それも参照にした（波多野・澤山 1982：5-44）。

4 大きな枠組みとしては、文繁本／文簡本の違いと、事繁本／事簡本の違いすなわち百二十回本／百回本の違いで、その成立の順は、百回本の文繁本→百回本の文簡本→百二十回本の文簡本→百二十回本の文繁本とされている（松村・小松 2005：158-163）。そして、金聖嘆は百二十回本をもとに七十回本を作成したという（同書：174-177）。七十回本の特質についての筆者の理解は大部分において宮崎市定の論考（1978〔初版は1933年〕）と小松謙の論考（2010, 2011）に拠っている。

5 岩崎菜子は『水滸伝』の諸版本の出版が政治状況、とくに文化革命期のそれと密接に関連していたことに触れた箇所、中華民国期に刊行された『水滸伝』は70回本、建国後は70回本の序章を第一回とした71回本が主流であったが、毛沢東が七五年八月に、百回本も百位十回本もすべて刊行して人民に「投降」ということについて学ばせるよう指示し、この指示を事前に知った姚文元ら四人組が利用としようと考えたからであるとしている（岩崎 2010：64）。この指摘は文芸の政治性を示唆する点で重要なものだと考える。

6 蛇足ながら、虎の餌食になる寸前の場面で虎に対するリスペクト云々の議論は、漢文水滸研究においては問題にならないことは言うまでもない。

7 漢文では「五七十拳」であり、なぜ「五六十拳」でないのかは不明。佐藤訳では、「六、七十も鉄拳をお見舞すると、虎は目から、口から、鼻から、耳からどくどく血を噴きだして」とある（佐藤 1979：294）。

8 佐藤訳では、「虎はついに息の根が絶えた」とある（佐藤 1979：294）。

9 これについては、漢族の基本的生業形態が農耕であり、蒙古族のそれが牧畜であることと関連しているのかもしれない。本論の6. を参考。

10 『水滸伝』においても殺人の問題については論じられていないわけではなく、例えば、小松謙は、魯智深と武松とを、林冲、花栄ら技巧派と好対照をなす存在とし、さらに、魯智深お武松についても違いがあると指摘している。すなわち、両者とも体力派と豪傑という点で共通するものの、魯智深には直情と計画性のなさが見られるのに対し、武松には、冷静沈着さと計画性が認められるという（小松 2010：145-146）。ただし、本論の「武松打虎」は『水滸伝』において有名な話であるものの、その原型となったとされている『大宋宣和遺事』においては見られない話だということである（林 2010：6）。